

安全な国産グリーン社会

SDGS
Safety
Domestic
Green
Society

第17回

健全な国産化へ向かう
心情づくり(1)

—Errare Humanum Est

一般社団法人 洗楓座 代表理事 佐藤建吉

▼はじめに

SDGSとして「安全な国産グリーン社会」の構築をテーマに掲げている。今回はD／ドメスティック／国内／国産を深掘りしたい。

▼Errare Humanum Est

国際化の背景となるバックグラウンドは、多国対応であり、多くの独自性をもつ国々との関係構築が必要であり、かつ協調が求められる。

「国際化」とは、「摩擦なく行動すること」といわれるように、国外へ出かける側の人や法人にも国際環境の整備が必要となる。決して一方的で国際化は達成できない。

今日明確に「国際社会」である。今後も同様である。そして今日まで政治も経済も産業も国際化を推進してきた。市場の拡大、競争力の向上、孤立化の防止など多くの対策や意義を得てのことであった。それは国も産業界も掲げたキーワードであった。

日本のものづくりは、中国、韓国、そして東南アジアはじめ途上国に進出し、コスト削減を狙って進め、同時に当該諸国の技術力の向上や産業振興に貢献してきた。

ところが気がついてみると本国・日本のものづくり現場は衰退し、しかも日本の国民の多くはものづくりを軽視する風潮さえ生まれてしまった。こうして日本の産業構造の基盤が崩壊し、新規産業への進出する気概をもなくしてしまった。

インジャパンというブランドは海外では高く評価されているのであるが、国内では高価な国産品を避け、むしろ低価格な海外品への利用転換をつくり出してしまった。それは、日本人によるメイドインジャパンの軽視、輸入品の重視といった海外品依存の国情に連鎖した。

こうした弊害に気がついていたのが現在であり、これも顕在化した状況となった。ある面、こうした結果を予測していたが、対策をする心の余裕はなかったといえる。見出しに掲げたErrare Humanum Estは日本人の共通した事象への気づきや取り組みであり、改善されなければならぬ。日本人は、保守的であり、予見して対策することには疎いようにも思われる。これが人間の性（さが）であるともいえる。古今東西共通であるがゆえのラテン語である。

一方、国内で顕在的な弊害は、農業の衰退である。米中心の農業の食料事情の変化、暮らしの変化による米需要の低下はみられたものの、水田の土地の生かし方、あるいは農業としての転用の方法は十分に検討されず、単に米の作付面積の減少を推進してきた。それは小規模から大規模への農業の転換という振への無関心さを助長してしまっただけであった。同じように林業や漁業といった産業も同様に衰退したのだった。しかし、その生産物への需要は日本製のメイド

▼エネルギー面での状況

国際化や国家主義は多様化や独自化も進みメリットもあるが、不確実性や偏見、さらには分断というキーワードも生み出した。そうして起きたのがエ

ネルギーの危機である。エネルギー産業では、原油石油、天然ガスなどの輸入価格の上昇、脱炭素社会への対応など新たな転換に対応しなければならぬ。風力や太陽光による発電などの事業化、さらに大規模化という予見的基盤造りが必須であった。

結果として、日本は国際化の中のエネルギーの国産化を推進しなければ未来がない。それには、上述してきたような予見と国産化が必須であり、後追いは出来ないテーマであった。これはエネルギー分野に限ったことではなさそうである。

2011年の3・11、東日本大震災により大きな原発被害を受けた福島は復興ばかりでなく、日本全体のエネルギー政策への見直しも13年が過ぎ、その被害を忘れようとしている。

地震大国である日本は熊本地震、能登地震と度重なる巨大地震による大被害を体験している。こうした被害や災害を、あるいは失敗を、体験／経験しなければ気付かないという心情は、日本人には、なお根深い。さらな

▼歴史から学ぶ／歴史をつくる

NHK大河ドラマでは貴族社会の在り様について物語し関心が高まっている。日本の再認識であり、日本の統一。そして、徳川による江戸時代となり、今日の江戸や東京の文明が始まった。国際情勢への転換のた

め明治維新がおこり、いわゆる近代化が進められた。西洋文化の科学技術に基づいた国づくりがなされてきた。そして、近隣諸国への進出が始まり、数度の戦争を経て、いまから80年前の終戦を迎えた。

その後も科学技術力を用いてもインドネシアなどよりも遅れて国内では標準化された。その後の普及は目覚ましく、多くの利便性を享受している。この「過ちは改むるに憚ること勿れ」とある。次回からは具体的な国産化への取り組みの事例を紹介したい。

▼まとめ

こうして考えてみると、日本国内での整備、国産化の定着には、心情的な理解と、それに根差したマネジメントが必要である。それはよりどころであり、集団的な倫理観を持つ日本人を育てる必要がある。論語にも、「過ちては改むるに憚ること勿れ」とある。